

4 十三湊の変遷 (第62図)

十三湊の成立


今回の調査では12世紀代に十三湊の活動が始まることが確認できた。宇野隆夫によれば、この時期は11世紀代の西および東日本の物資流通圏の成立を受けて、東日本と西日本の物資流通が活発に始まる段階であった。十三湊はまさにそうした全国的要請の中に成立していったことになる(十三湊Ⅰ期)。

しかし現在までの調査では、12世紀後半代の遺物は十三湊北半部のいくつかの地点を中心に検出されているが、まとまった遺構は確認できていない。初期の十三湊がどの程度の規模であり、どのような構成であったのかが奥州平泉政権との関わりとも合わせて注意される。すでに奥州藤原氏との関連を推測させる京都系かわらけの出土地点が弘前市中崎館、浪岡町浪岡城など岩木川水系の要所に点在したことが指摘されており、十三湊がそれら岩木川水系の延長線上の拠点として掌握されていた可能性は高い。

十三湊の展開

そして14世紀の中頃以降、十三湊は北半地区を中心に大きく遺構密度を増していった。この時期に顕著に現れる瀬戸施釉陶器小型品や珠洲の壺・甕・すり鉢、越前甕貯蔵具・調理具の流通な

| 調査地点 | 1200 | | 1300 | | 1400 | | 1500 | | 1600 | | 1700 | |
|------------|-------|--|------|--|-------|----|------|-------|------|--|------|--|
| | 十三湊Ⅰ期 | | | | Ⅱa | Ⅱb | Ⅱc | 十三湊Ⅲ期 | | | | |
| 92年度調査第1地区 | | | | | ————— | | | | | | | |
| 93年度調査第1地区 | ————— | | | | ————— | | | | | | | |
| 92年度調査土塁 | | | | | ————— | | | | | | | |
| 92年度調査第3地区 | ————— | | | | ————— | | | | | | | |
| 93年度調査第2地区 | | | | | ————— | | | | | | | |
| 檀林寺地区 | | | | | ————— | | | | | | | |

 遺構に都市計画性が認められる時期

第62図 考古学的調査の成果に基づく十三湊遺跡の時期区分

どに代表される日本海交易の転換を背景にしたものであったと評価できる。この時期には十三北半部のかなりの広範囲にわたって都市的な空間の形成が行われていったと考えられる（十三湊Ⅱa期）。

さらに14世紀末以降になると、十三湊は最も整備された時期を迎える。砂洲の中央部には、東西方向に大土塁と堀が建設され、砂洲を南北に貫く中軸街路も設定される。土塁と堀で守られた北半部には安藤氏と思われる大型の館をはじめいくつかの館が点在し、館の周辺には直属する工人の工房や家臣屋敷が造営されていた。それらは砂洲の地形に合わせた軸線を基本とする都市計画に則って建設されており、自然発生的な港湾町が安藤氏を中心とした領主権力によってこの時期に再編された状況を物語る。領主が湊そのものに居を構えていたことは、権力の基盤を象徴したものと言えるだろう。

15世紀前半には街区は推定南北1.5kmにわたって伸びていたと考えられ、町屋地区では短冊形地割に区画された両側町として家並みがつづいた。名実ともに日本海屈指の貿易港としての形態を整えていた（十三湊Ⅱb期）。

この時の都市プランで注目されるのは、中軸街路が後の城下町のように安藤氏の館を起点にして始まっていたのではなく、おそらく現在は水没した位置にある砂洲北端の宗教施設を起点として南へ中軸街路が敷設され、その脇に安藤氏館など主要施設が配置されていたと考えられることである。

こうした都市プランのあり方は、宇野の指摘によれば、11世紀の終わり12世紀前半の白川・鳥羽院政期にかけて行われた鴨川の流路直線化工事によって賀茂神社を起点とし、鴨川を挟んだ両側に白川北殿や寺院などの施設が配置されたプランを嚆矢とする。鎌倉でも鶴ヶ丘八幡宮を起点に若宮大路が伸び、その脇に幕府や執権の屋敷などの主要施設が展開するという構成であった。それらを見渡す時、十三湊の都市プランが先行した都市プランに基本的に一致することは留意すべきであろう。都市プランの系譜と具体的には安藤氏と都市住民のどのような力関係によって十三湊の都市改造が実行されたのかを考古学的に検討する重要な視点となるだろう。

またこの時期には十三地区だけでなく、北側の相内地区に所在する宗教遺跡山王坊跡など、安藤氏と強い関連性をもった施設が周辺に広く成立していた。十三・相内両地区を一望にする唐川城は、横堀を主体とした特異な構造から、まさに当該期の山城と評価され、都市の整備とともに周辺の施設が飛躍的に拡充されていった状況を知ることができる。

中世十三湊の終焉と近世の十三湊

15世紀第3四半期になると、それまでの館の堀（区画施設）を壊す形で遺構が掘られている。つまり、これまで整備されてきた都市的プランを壊す様相を見せ、急激に遺構・遺物が見られなくなるのである（十三湊Ⅱc期）。

そして、16世紀末・17世紀初頭まで考古学的に生活の痕跡を全くつかむことはできなくなる。これは15世紀第2四半期の安藤氏と南部氏の抗争をきっかけにした安藤氏の北海道への拠点の移

動によって、中心勢力を失った十三湊が北方の貿易港としての役割を、いくつかの港に譲っていった～たとえば北海道でこの時期に成立してくる勝山館とその港など～ためと評価できよう。

そして17世紀には弘前藩の力を得て十三湊は再興されるが、十三湊の地位は岩木川水系と鯺ヶ沢の中継港にとどまり、再び日本海交易の主力港となることはなかった。

この17世紀の十三湊の再興は、砂洲西側の前潟沿いに街村状集落を形成したものであったが、18世紀代には中世十三湊の中心部であった砂洲中央部への家屋の進出が顕著に見られることから、十三地区がかなりの活況を呈したことがうかがえる（十三湊Ⅲ期）。（千田）